

リチャード・コックス日記(Diary of Richard Cocks)試訳 1615年10月から12月まで

MORI, Mutsuhiko / 武田, 万里子 / TAKEDA, Mariko / 森, 睦彦

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

139

(終了ページ / End Page)

167

(発行年 / Year)

1969-03

リチャード・コックス日記 *Diary of Richard Cocks* 試訳

——一六一五年一〇月から一二月まで——

武田 万里子
森 睦彦

平戸イギリス商館長リチャード・コックスの日記が、近世初期の日英交渉史の基礎史料であるとともに、日本の政治・経済・社会・風俗等の重要史料であることは論をまたない。

原本は大英博物館が所蔵し、一八八三年に *Hakuryū Series* に収録されて刊行され、一八九九年村上直次郎博士が更に補訂して東京で出版された。本稿は村上本によった。原本及び刊行書の比較は、岩生成一教授により行なわれている（「リチャード・コックス日記について」『神田博士還暦記念書誌学論集』七〇三—一九頁、昭三二年）。

訳本は、古く中里左太郎氏が「江戸会誌」第二冊二・三号（明二三年二・三月）にごく一部を訳したのをはじめとし、「大日本史料」一二編にも関係事項を抄出して、対訳している。近年皆川三郎教授が抄録本に解説と抄訳を付して刊行され（篠崎書林、昭三二年、増補昭四三年刊）、また「長崎県史 史料編 第三」（昭四一年刊）に巻頭の一六一五年六〜九月の四か月分が所載されて

いる。

コックスの伝記的考察は岩生・皆川両教授の論考に詳しい。岩生教授が今年度法政大学大学院博士課程での演習で本日記を取り上げられ、厳密な指導を受けるにあたり、可能なら全訳を試みたいと念願するにいたったが、浅学の徒としては、その目標達成の道は程遠いことである。ついて「長崎県史」の分をついで一六一五年の残り分を本誌に発表し、しかるべき便宜にもあて、また諸向のご指導を仰ぐ所存であり、ご教示をお待ちしている。

特に、関係人名、商品名等は難解でありご指導を得たい。

史料の閲覧に際してご厚情をたまわった松浦規氏・松浦沢氏・松浦史料博物館各位・谷村勇氏・長崎県立図書館郷土資料室各位、郷土史関係諸般についてのご指導をいただいた榎崎豊市猶興館高校教諭、語学面でのご助言をいただいた岡田尚法政大学教授・三浦徳弘同大学講、火炮についてご教示いただいた有馬成甫氏師に厚く謝意を表する次第である。

(1) 一六一五年一月一日(元和元年八月二九日)内匠殿から淡水魚の一

(2) Tacemon Dono

種を一皿を贈られた。藩主の鍛冶の家が下男の不始末から今夜火を出したが、すぐ消し止めた。しかし、藩主の命によってその家の門扉は閉ざされた。と言っても戸があいているかいないかは問題ではなかった。家はきびしく監視され、家を焼いた連中は流刑か死刑に処せられるのである。

午後、藩主を晩餐に招く用意のものを買わせに長崎へやった船が戻ってきて、言いつけたものと、ジョルジュから私へのことづけの砂糖づけ二壺を持ち帰った。彼の妻スザンナが砂糖づけ一箱、梨一箱、無花果一箱、支那甲必丹の娘あての砂糖づけの小箱一つを送って来た。小箱は彼女に送り届けた。ジョルジュの手紙

(6) ダミアン・マリ

は長崎発新曆一〇月九日付で、その中で彼は、
(7) (英曆九月二九日) Damian Marin
とフワン・デ・リエバナがカピタン・ガローチヨに捕えられてい
ると報告して来た。これは信用できる語だ。
(8) Ino, B. Iavarata
(9) Genjico

一〇月二日

船大工のトーマス・デービスが今朝夜明けに天然痘で息が詰ま
って死んだ。
(10) Thomas Davis

私は藩主とその二人の兄弟、及び信実、主馬殿、三五郎様、内
匠殿、主膳殿、それに藩主が供として選んだ五人の侍たちを招待
した。彼らは日本式の午餐をとり、英国式の晩餐をとった。藩主
(11) (12) (13)
と晩餐をとっているとき、唐津侯が到着したという伝言が届い
た。そこで彼は食事を切り上げ、上陸する唐津侯に会いに出かけ
た。オランダの大船から侯の通過の際三発の礼砲を上げ、小船は

上陸の際さらに三発打った。そのうち唐津侯は到着したことを私
に伝えて、明日午後商館の風呂に入りに来ると言ってきた。

(14) (15) (16)
ピーター・ウオッデンが夜中に三度も塀を乗り越えたことがわ
かったので、彼を再び船に帰した。彼は度しがたい男で改心の余
地がない。

一〇月三日

平戸侯は、唐津侯が夕食に来ることを知って、鹿一頭を贈って
来て、昨日のねんごろなもてなしに對して、丁寧に礼を言ってよ
こした。午後、唐津侯はその言葉どおり商館にやって来た。平戸
侯と唐津の重臣三人が一緒だった。私は一同を満足のゆくように
出来るだけもてなした。そのあと、彼らはオランダの大船に乗り、
陸に戻った時、同船から礼砲六発、小船から三発を打った。

夜に入って、落度のあったオランダ人の船員二人が船から二、
三日姿を消しているため探索願いが出された。うち一人が商館に
来て私の前に膝を折り、許されるよう取り計らってほしいと懇願
したので、私は指揮官に一言書き、英国商館の外科医を彼につい
て行かせた。彼らが出て行くやいなやもう一人のオランダ人が連
れてこられ、同様に私の好意にすがろうとした。しかし私が手紙
を書いている間に、自分を監視している連中を撤き、それから当
分姿を消してしまった。

唐津侯から長刀二振と刀一振を贈られ、また、石弓から火矢を
発射するところや、火槍術を見たいということだったが、それら
は侯がこれから訪問しようとしている領地から戻ったときに見せ
てほしいということであった。

一〇月四日

唐津侯はけき平戸をたつた。オランダの大船から、侯が通過する際三発の礼砲を打ち上げた。⁽²⁰⁾

私は長崎発九月三〇日付で、エドモンド・セイヤーズから手紙を

Ed. Sayer⁽²¹⁾

もらった。彼はその中で、手紙と贈り物を権六殿に手渡した。と、権六殿は彼に二日ほど逗留するように言い、出来るだけ努力して我々の役に立つようにしようと言ってくれたことなどを書いてよこした。そこで手紙を二通、ジョルジュ・ドゥロイスとカピタン・ガローチョに出した。

二侯を招くのに買った品物の余りがあったので、友人たちと相談したうえで明日の午餐に九人の侍たちを招くことにした。すなわち権之助殿、⁽²²⁾内膳正殿、又三郎殿、大炊殿、虎左衛門殿、⁽²⁴⁾右衛門殿、庄介殿、オトナゲン殿、⁽²⁵⁾左兵衛殿である。われわれの奉⁽²⁶⁾行丑之助殿や、藩主の近習も招こうと思つたが、彼らは町にいな⁽²⁷⁾かゝつた。

一〇月五日

支那甲必丹のアンドレア・ディティスが五島から平戸へ戻り、⁽²⁸⁾金の指輪を持ち帰つた。これは、買った時の価が五ポンドのもので、中国の宦官への贈り物にしようと、先月九月一七日に彼に渡したものである。しかし、重要な人物が二人この件に係係しているのに指輪を二個用意しなかつたので、考慮の上、四本のカタナすな⁽²⁹⁾わち日本の剣を買つて、それぞれ二本ずつ贈るのが最もよいと

「リチャード・コックス日記」試訳(武田・森)

考えた訳である。支那甲必丹はまた贈り物として私に麝香の袋を

くれた。これは未知のシナ人が私に贈つてくれたものである。

また彼は、我々のシナ貿易の企てはよい結果をもたらすに相違ないと請け合つた。神のおかげである。

午餐に招いた侍がやつて来た。人数は八人で前に見える通りである。午餐の途中、豊後様の養子(平戸侯の末弟)⁽³⁰⁾が来た。人々は彼を招じ入れ、その後皆が満足して帰つた。

権之助殿は私に日本紙一〇束を贈物として届けてくれた。

一〇月六日

我々は北側の隣人の⁽³¹⁾地所を四〇匁で買った。彼女には所帯を移動させたが、我々は二五〇匁だけ支払えばよいことにした。彼女は借金がたくさんあるので、その分の金額を差し押えておいた訳である。残りの一五〇匁は、彼女とその子を養なう費用として内々に与えた。⁽³²⁾ニールソン君は船大工と船員に払わせるために丁銀六〇四匁を船の書役に渡した。そして川内浦へ石灰一五〇袋を送つた。

またシナへ贈る刀を四振買うため、というより拵えをほどくため、支那甲必丹に⁽³⁴⁾四〇レアル渡した。また彼に同様の目的で⁽³⁵⁾リアマン金、重さ四匁のものを渡した。

またニールソン君に丁銀一貫目を渡した。彼もまた丁銀一六〇匁を支那甲必丹に渡した。すなわち丁銀一二〇匁は刀身用に、小粒四〇匁は拵えの工賃としてである。

一〇月七日

支那甲必丹のアンドレア・ディティスが来て言うには、マカオ

船のカピタン・モールや他のスペイン人、ポルトガル人が長崎から平戸へ来て、オランダ人が捕えたジャンクのポルトガル人船長を奪い去ろうとして、一貫目で二隻の帆船を雇ったという話をした。また、同船内ではひそかに武装したさまざまなスペイン人、ポルトガル人がいるということ、これは、くだんのジャンクから長崎へ逃げ出した三人のシナ人の口から漏れて他のシナ人に伝わり、その中の一人が支那甲必丹に手紙で知らせたのだという。それで私はオランダ商館へ行き、このことを知らせた。彼らは私に心から礼を言った。

私は対馬の宿主へ、同地の商人に託して手紙を送り、我々の胡椒の売却についてその商人に聞いてくれるように頼んだ。胡椒はとうに売れているはずである。そして、もし要請があれば胡椒をもっと送ること、今回の代金を確実な最寄の便で持参するか、送るかしてほしいことなどを書き送った。

一〇月八日

今日の午前中、キャプテン・コピンドールとその部下を乗り組ませて大坂へ送った三艘の帆船が戻つて来た。キャプテン・コピンドールからは大坂発九月二三日付の手紙を受け取っており、同日付でイートン君からの手紙も受け取った。その中で彼は、大御所様は彼らの到着の八日前に都を出発し、キャプテン・アドムズは大御所様が途中のある場所にとどまると聞いてその後を追いかけて、そこで用事を片づけてから戻ろうとしていること、オランダ人は大御所様が都から去る前に用事を済ませたことを書いてきた。また、彼らとしては船は三隻とも戻した方がよいと思つたこと、な

ぜなら、戻れるのがどのくらい先になるかわからなかったから、とも書いてきた。また兩名とも一六号の包みと、竹器入りの黒色塗料五本、及び蠟の小塊五個とが積荷の中に欠けていると書いていた。

堺の定宿の主人も平戸へ来て、酒一樽をみやげに持参した。そして悲嘆にくれて、我々の商品が焼けた際持ち物をすべて焼いてしまったので、また新規にやり直さなければならなくなり、権六殿のジャンクの知工（事務長）としてシャムへ渡るつもりなのだといった。

私は三五郎様と左兵衛殿の許へ通訳をやつて、商館員と商品を上方へ運ぶのに帆船を貸してくれたことの礼を言わせた。キャプテン・コピンドールは大型帆船の船長に二〇匁、知工（事務長）に一〇匁与えたと知らせてきた。また次のような贈り物をした。

家老の権之助殿へ六〇匁の黒縞子一反、一コルジハレアルの白天竺木綿三反、ナイフ五丁。藩主の用人庄介殿に一コルジ一五レアルのアレジャ布一反、一コルジハレアルの天竺木綿三反、ストラット掛布三反、侍頭の内膳正殿に綴子一反、賄方の助右衛門殿に一コルジ一五レアルのアレジャ布一反、一コルジハレアルの白天竺木綿一反、一コルジ七レアルのダブル巾のポル布一反、ストラット掛布一反。藩主の料理人頭に一コルジ一五レアルのアレジャ布一反。藩主の平料理人に一コルジハレアルの白天竺木綿一反。藩主の料理場用の履物作りに一コルジハレアルの白天竺木綿一反。もう一人の老料理人に一コルジハレアルの白天竺木綿一反。となりの料理場付きの女中五人に一コルジ七レアルのダブル巾ポル

布三反。

私は六日前の日付のエドモンド・セイヤーズからの手紙を受取った。その中で彼は、権六殿が事を延引させて彼を遠ざけようとし、二人を自由にしてくれない、それどころか、ポルトガル人はフワン・デ・リエバナとダミアンを船室に足枷をはめて閉じ込め、誰も二人に話をしに出来ないようにしたと書いてよこした。

一〇月九日

我々は一一六号の梱包を倉庫の中で捜したが見つからなかった。包み荷の伝票や日計帳を調べた結果、その包みと蠟と五本の竹器入り塗料はすべて三五郎様の大型帆船で送られたことがわかった。これらの件についての答は船頭、知工(事務長)、ジョン・フィービにかかっているということになる。

John Pheby

エドモンド・セイヤーズが長崎から戻り、出来るだけのこととしたが、二人を自由にすることはできなかった、という権六殿の返答を伝えた。そこで私は藩主の許へ行ってこの次第を話し、この旨を大御所様に知らせようキャプテン・アダムズの許へ早船で手紙をやるつもりだから、支援の手紙を下賜されたいと願った。

藩主はそれを約してくれた。私はそこで帆船の用意を整えて手紙を書いた。すなわち、写しに見られる通りのキャプテン・アダムズ、

(54)

Watkanari

Wakkanari

ウヰツカム君にあてた概略の手紙一通。ただし日づけは明日付である。またキャプテン・コピンドールに一一六号の梱包と蠟、塗料の紛失を知らせる手紙を通。また、どの手紙を通じてもキャプテン・アダムズに、できる限りの手段を用いてこれら二人の人間を自由にしてほしいことが伝わるようにし

た。権六殿が家来をよこして私に贈物として屏風一双と巻物二箱を送ってきた。それぞれに木綿の巻物二〇〇本が入っていた。

一〇月一〇日

私は船を派遣しようとして藩主の許に手紙をもらって来るように人をやったところ、藩主は伝言をよこし、この件について評定を行なった結果、私に対してはもうしばらくとどまってほしいと再び要望すること、藩主としては、二人の人間を自由にできることは疑いなしであるから、自分の家臣の一人を権六殿の許に遣わそうと思っているということを伝えてきた。それで、私は自分の意図とは大分違うが、やむを得ず目的の達成を思いとどまることにした。

私はマカオ船のカピタンのマルティン・デ・ギニアからとカピタン・ガローチョからの手紙、またジョルジュ・ドゥロイスから

Martin de Guina

の第三の手紙で日付けはすべて新曆で今月一五日のもの、また今

月一七日付のアルバ

(56)

Alvaro Munos

たことを記すのを忘れた。

ジョルジュ・ドゥロイスは網靴下二足、彼の言によれば七〇匁の値段のもの、七本半で一匁の蠟燭一〇〇本を送ってくれた。

また新曆今月一二日の長崎発メルヒール・ファン・サントフォル

(57)

Melchior van Santofol

トからの五番目の手紙、これはただの推薦状であるが、を受け取

(58)

た。彼はまた私が貸したオランダの年代記を返却して来た。また

(59)

Patani

Patani

量一六〇斤、正味一五五斤で、一〇〇斤あたり八〇匁である。

真夜中の一時ごろオジアンダー号の平大工のトーマス・ヒース

Thos. Heath

が赤痢にはじまった長患らいで死んだ。

一〇月一日

我々のシー・アドベンチャー号が今日川内浦で進水した。私はハント君に大工たちが本分を果たしたかどうかを調べさせるため同船に行ってもらった。エドモンド・セイヤーズが同行した。今月一〇日にイートン君あてに書いた手紙を平戸の帆船に託して送り送料五匁を渡した。その手紙にキャプテン・コピンドールあてのもう二通の手紙、すなわち……君からのオスタウィック君からのもの、及び右二通の手紙を大急ぎでキャプテン・アダムズに届け、ダミアンとフワンの解放を大御所様に申し入れるよう要望した。また明日二日づけの私自身の第三の手紙も同封した。またイートン君にもう一通手紙を書き、等安がシナ人と戦争する任命を受けたかどうかを調べて答えを送ってくれるように頼んだ。

一〇月二日

昨日私は書くのを忘れたが、船員たちがトーマス・ヒースを、以前彼の仲間のトーマス・デービスを葬った場所に埋めようとしたところ、悪党どもが棺を掘り上げ、絛帷子とシャツを盗み、土の上に死体をむき出しにしていったのを見つけた。ひどいやつらである。そこで船員たちはトーマス・ヒースの棺を海に沈めた。

藩主の長兄源四様、つまり主殿様に二〇斤の蠟を売った。代金は残りが売れてから支払われることになっている。

今朝オジアンダー号で、棟梁も含めて一四人の大工が働き始めた。全部船大工である。

今日はアントニーという名で、ジョン・オスタウィック君が採用したボーイのことで一騒動あった。彼はあるスペイン人の使用人らしいが、そのスペイン人は一人の無礼なならず者の日本人を

Antony

商館へよこし、その男は私や他の館員には一言も口をきかずにオスタウィック君の部屋に上がってボーイをつかまえ、力づくで館外へ追い出そうとした。にもかかわらず彼はボーイを連れずに行ってしまった。しかしすぐあとから平戸侯がそのボーイを自分の手に引き渡すように言って来たので、その通りにした。平戸侯はもしそれがスペイン人側の無体だとしたら(私はその通りだと言いたいのだが)、ボーイは家来をつけて返そうと約束してくれた。

船長のジョン・ハントとオスタウィック君が、平戸侯が我々に貸してくれた小屋に行つたところ、年のころ一一、二才の女の子が裏の塀の下に死んでおり、ほんのちよつと前に殺されたらしく、犬があさつていて、両足と下半身、片手が食われているのを見つけた。おそらく悪いやつが乱暴したのち殺したか、さもなければこの子は奴隷であつて、主人の不興を買つて殺された上に捨てられて犬に食われているのだろう。この地方ではあたりまえのことだ、奴隷の生命はすべて主人の手中にあり、いつでも殺すことができ、法によって規制を受けるものではない。

一〇月三日 (元和元年九月一日 新暦一〇月三日)

夜ふけ、真夜中ごろオジアンダー号の小スキフ船が盗み出され、船員の語るところによれば、大船から逃亡したオランダ人の一人の仕業で、以前私を取りなしの手紙を書いてやった二人のう

stille

ちの片方だということだ。船員たちは夜分、真夜中ごろに、彼が船橋にいたのを見かけたと言った。疑いもなく船員たちがボートを与えて彼を逃がしたのだと思う。一人の悪党がもう一人の逃亡を助けたか、見ぬ振りをしたということだろう。実際、私は彼らより言うことを聞かぬ、野卑な船員を見たことがない。その張本人はドーリントンという高級船員である。そこで我々は連中が許可なく昼も夜も外出しては乱行して歩くのを、そしてそのうちで一番悪いのは高級船員たち自身なのだが、絶え間なく見るに及んで、命令を出してメイン・マストに掲げ、船員を三等分して、そのうち三分の一は屋間遊んで日没前に帰船するように、残り三分の二は船務に携わり、船大工は自分の仕事をするように決めざるをえなかった。このドーリントンは船員全部のいる前で、指揮官も船長もその他の誰も船員を水につけたり鞭で打ったりする権限はないと放言し、彼やその他の連中は自分たちの挙げる食品は制限なく手に入れられるのだと言いつたりした。彼は酔いどれで、不服従で、反抗的な男であるからには、当社に勤めるにふさわしくない。

私はオランダ商館へ例の男がスキフ船を盗すんだ次第を伝えた。また同様のことを内匠様と船大將の所へも伝え、彼らはそのオランダ人の行方を調べに人を出した。

支那甲必丹が、五島全土に火災があり、藩主の館も他の家と同様焼けおち、三〇〇軒ばかりの家々のうち一軒として焼け残ったものはないと伝えて来た。これは七、八艘のジャンクにのせて来たシナ人の商品を日本人が略奪しようとして火をつけたのだと一

「リチャード・コックス日記」試訳(武田・森)

般に考えられている。ところが、火の勢いが激しくて、ほとんど何も助からず、商品を避難しようとして危険を冒したシナ人が五人焼け死んだということである。

午後になつて、ガミアンとフワンの積放について藩主が長崎へ行かせた家来が、はかばかしくない返事をもつて戻つて来た。ポルトガル人は以前と同様、二人をどうあつても引き渡さないと答えたそうだ。また、その家来は帰ってくる途中、平戸から七里ばかりの所で、我々の船からスキフ船を盗んだオランダ人に出会ったので、人と船と両方を連れ戻つたという。そこで私はそのオランダ人をオランダ商館へ行かせたので、商館側からは厚く礼を言つて来た。

私は藩主の許へ、どのような返答を権六殿から与えられたか確かめに、どうか知ろうとして出かけた。それについては前に述べた通りである。それで、藩主に左兵衛殿と後藤庄三郎あてに、これら二人が我々の船がシャムへ行く際に雇われるにいたつた次第を明らかにした支援の手紙を下賜されることを願ひ、藩主はそれを許し、すぐあとから商館へ届けて来た。私はもう一通の手紙を忠兵衛殿に日本語で書き、これら二人を自由にすべく、大御所様に取りなし方を頼んだ。それから我々はこれらの手紙の使者と、四本の櫂で漕ぐ小帆船を雇ひ、旅費に小粒二一〇匁を支払ひ、手紙を大坂か都にいるイートン君に届くように計らつた。そのため彼らは昼夜船を漕いで行く筈である。

一〇月一四日

私は藩主の手紙を発送し、キャプテン・アダムズ、ウヰッカム

君、イートン君あてに概略の手紙を書き、二日前の手紙でそうしたようにさまざまに申し送って、これを前のように早馬に託して送った。私は川内浦からジャンクを引いてこさせるため帆船を六隻出した。それらは昼ごろジャンクを平戸の碇泊地に引いて来た。

私は昨年シナへ五五〇ペソ投資した際、キャブテン・ハウから預かっていた書き付けを返した。私はそれを彼の兄アンドレアに返した。また、トメー殿へバンタムの胡椒五〇〇斤を売った。残り売ってから代金が支払われることになっている。

藩主のカフロ二人が長崎から来て私に語ったところによると、一人のイギリス紳士がマカオ船に枷をはめて捕えられていて、二人は彼を見たが、二四、五才の若い男だったということである。しかし、これはポルトガル人とスペイン人のわなで、私がわずかこれだけの言葉を信じて、他に証拠もないのにこれを大御所様に訴え、事実無根ということとその機嫌を損じるように図ったのではないかと思う。しかし、その船に乗るかもしれない知人に、実際そういうことがあるかどうか気をつけてきてほしいと指示した。

一〇月一日

今度の五島の火事で、使者、すなわち王の書翰を運んでいた男は七貫目相当の持ち物をすべて失ってしまった。彼は老人であったが、ことば遣いがよかったのでこの仕事に従事するのを選ばれたのである。そこで支那甲必丹は、彼自身の持ち金からその男に五〇ペソすなわち四〇〇匁贈るつもりであるから、私にも二〇ペ

ソ加えてほしい、彼の損失が気の毒だから埋め合わせに両方で七〇ペソにして、全部私の名で送るつもりである、と言い、また、もし神の思し召しがあれば、そのうちにより大きな事柄、すなわち我々にシナ貿易を開かせるのに成功してみせるということも約束した。

支那甲必丹の弟のハウと、もう一人の長崎のシナ人リヤンウの両方に贈り物を届けた。兩人とも我々のシナ貿易遂行のために雇った人間である。贈り物は一コルジ一六レアルのと一七レアルの白天然木綿六反⁽⁷⁴⁾四〇匁四分。一コルジ一五レアルの青パイラム布六反⁽⁷⁵⁾三六匁。一コルジ一レアルの赤セラ布六反⁽⁷⁶⁾二八匁八分スラット掛布六反。ナイフ六丁⁽⁷⁷⁾三匁三分三厘。

ジョアン殿は我々のジャンクの備品を船に棟のつくまでの間入れておくようにと、道の向う側に持家を貸してくれた。私は支那甲必丹を通じてジョルジュ・ドゥロイスに手紙を送り、絹靴下二足を受け取ったことを伝え、彼が来るまで角びんを取ってあるからと言ってやった。私は支那甲必丹に指示して、バンタムに行く英船に乗り組ませるシナ人の船大工三人をみつ寄せ、また、もしあれば一五〇本の太竹を買ってくれるように頼み、またポルトガル人が船上に英国人を捕虜としていられるかどうか尋ねさせた。我々はジャンク用として取り寄せた木材、その他のものを全部を川内浦から平戸へ移した。トメーまたはジョアン殿の家を、それらを納めるために借りたからである。

一〇月一日

唐津侯が平戸へ戻り、石弓から火矢を発射するところが見たい

と伝えてきた。我々は、唐津侯と平戸侯の前で二度実演し阿侯は大いに満足した。唐津侯は同じものを作る見本とするために、石弓と、点火薬の処方箋とを所望した。真夜中ごろ彼は唐津へ出発した。そのおかげで、もし翌朝まで彼が滞在したなら差し出すところだった象嵌入馬銃二丁は献上せずに済んだ。

藩主の親族のトシヨ様が二反のカンバイヤ布を買った。

10月17日
Tansho canbaia

午前中キャプテン・スベックスが都から戻り、歓迎のためオランダ商館から *Capit. Speck* 大船から六発の礼砲を打った。私はオランダ商館に彼を尋ねた。彼は私に、もし都への到着が二時間遅れたら、大御所様は彼が着く前に出発してしまったであろう、と語った。そして大御所様自身彼に語ったところによると、彼らが捕えたポルトガル船は人も品物も自由にしてよい、もし朱印状を持たなければ、ポルトガル人もスペイン人も今後同断である、しかし朱印状があれば干渉してはいけない、ということだったそうだ。

彼はまた、キャプテン・コピンドール、ウイックカム君及びイートン君からの都発九月二八、二九日付の手紙三通、そしてイートン君からの一〇月二日付の一通、他に、大坂の定宿の主人と通訳トメーからの二通も一緒に手渡ししてくれた。

そしてジョルジュ・ドゥロイスが来て私に語った所によると、マカオ船のカピタン・モールが云うには、もし権六殿が望むならば権六殿の許可をえて彼らを捕虜にしたのであり、その意向次第で彼らを自由にするつもりであるから、ということである。しか

し私は反対のことをいっている彼の手紙を持っていると答えた。いづれ事実が判明することである。
私は何かからくりがあると思う。
ジョルジュは私に贈り物としてポルトガル産のブドー酒一瓶と、大梨一二箇、そしてクラッカーと小さいタルトを二箱くれた。

10月18日

通訳シモンが私に一〇月八日付のイートン君からの手紙をもたらした。そのなかで彼は、カンバイヤ布の包み全部を開いたところ、天竺木綿のほとんど、すなわちそれらの四分の三にしみが出てほろほろになっているのを見つけ、見られたものではなく、我々の宿主にそれらすべてを一反六匁で買うように掛け合ったが、絶対に売れないだろうと答えて、彼はそれを買わなかったと書いてよこした。また彼はそのうちの一〇反の彩色チャウター布が欠けていたのは、積荷の中に入れてあったと書いていた。

10月19日
Bassan

主馬殿は私に手紙をよこし、唐津侯に会ったこと、侯から次の品物を送るように私に知らせるよう託されたこと、これらの品物運んだ者に代金を託すと侯が語ったことを書いて来た。そこで私はその品々を主馬殿の使い渡した。

白天竺木綿二〇反 一コルジ二〇レアル

一反一五匁 計三〇〇匁〇分

スラット掛布 二〇反 一コルジレアル

一反一〇匁 計二〇〇〇

アレシヤ布 五反 一コルジ三〇レアル

一反二〇匁 計一〇〇〇

合 計 六〇〇

⁽⁸⁸⁾ 助大夫殿から牛肉を贈られた。またシヨルジュ・ドウロイスは次の諸品の勘定を済めた。

砂糖菓子四壺 一壺五〇匁 二〇〇匁〇分

麦麴または小麦を挽く石臼二箇 一〇〇

獣脂蠟燭 ^{Fat} 七〇本 一〇〇

以上商館用 小 計 二二〇〇

他に絹靴下一足キャプテン・コピンドール用 四〇〇

他に毛糸靴下一足同人用 六〇

他に緑色絹靴下一足オスタウイック君用 三五〇

他に絹靴下二足

キャプテン・コピンドールまたはオスタウイック君用 七〇〇

小 計 一五一〇

他にマカオから来たピロードと繩子の残品について、収益の他に彼に支払うべき額 二七二

合 計 六四三

一〇月二〇日

私はアルバロ・ムニョスの手紙に返事を書いた。そしてそれは別にデイエゴ・フェルナンド・リゴータにあててシヨルジュ・

Diego Farnando Rigore

ドウロイスに四ガソタの蠟燭用油脂を与え、そしてその残りをで⁽⁸⁹⁾きるだけ売るように云ってやった。

内匠殿から牛肉を贈られた。またシヨルジュ・ドウロイスの細君に一コルジ一七レアルのデヘル産天竺木綿一反を贈った。それは彼女が時々英国商館で使うように贈ってくれた果物や砂糖づけ^{Best Dishes}に対する礼である。

一〇月二一日

今夜半オランダ人の捕虜となっていた二人が大船から逃亡した。二人共ポルトガル人で、一人は彼らが捕獲したジャンクの船長、他の一人はそれ以前に五回も捕えられたことのある商人である。

ステイカモン殿が二羽の家鴨と一皿の梨をくれた。彼は藩主を^{Stacion}なくさめる喜劇役者あるいは道化師である。

一〇月二二日 (和曆九月一日)

この夜中にオランダ船から逃亡したポルトガル人二人は平戸侯が追手に出した人々によって捕えられ、連れ戻された。

権六殿の下僕は一反一〇匁のストラット掛布四反を戻して来た。このようにこれらの行商人たちは我々を利用するのである。そして別の二〇匁は支払わないつもりでいるらしい。

キャプテン・スペックスは我々のジャンクの古い舵と大きい樅二本を買いに人をよこした。この値段は両方の側の値を知らない同志が一貫一〇〇匁に決めた。

一〇月二四日

キャプテン・スペックスが来て私に、大工がジャンクの舵のこ

とで彼をだましたのだから（彼らオランダ人がお人好しなので）、我々の舵を一貫一〇〇匁で買う必要はなくなり、再び戻して来たといった。

一〇月二五日

私はキャプテン・スペックスに手紙を出し、オランダ船ヤカトラ号で英国船を修理のため傾船してほしいと頼んだ。我々は現在の位置で船を陸にあげて修理することができないとわかったからである。我々は船を危険にさらさずには竜骨に到ることができないためである。

大御所様の末子上総様の家臣が商館に来て主人のため次のような買物をした。

一丁 一五〇匁の象嵌入鳥銃 二丁 三〇〇匁 〇分
 ポレル布二反 二〇〇 〇
 Dhatis⁽⁹¹⁾
 アマダバット産アレジャ布 一反 二〇 〇
 Amad⁽⁹²⁾
 信実から牛肉を贈られた。

キャプテン・スペックスは手紙をくれて、傾船するための小船は、今度の大潮のときに修理のため陸あげしなければならぬから貸せないといつて来た。

一〇月二六日

私はイートン君に手紙を出し、秀頼様⁽⁹²⁾が薩摩に生きていて、多数の船が準備を整えているという、そして大御所様⁽⁹³⁾が北国の大名と戦争をしようとしているという噂が当地にあることを通報し、この話は彼らの内輪にしておくように頼み、もし必要なら最悪の事態を免れるように注意を怠らないでほしいこと。そして以

「リチャード・コックス日記」試訳（武田・森）

前の取引すべてに関して本当の計算書を送ってほしいと書いた。我々の欠乏に関して会社に本当の収支決算書を送り、何が起ろうとも避けられるようにしたためである。

ジョルジュ・ドゥロイスはマンゴウ二壺と大梨二〇箇を長崎から送って来た。しかし手紙はなかった。^{Marsens}

藩主は今日オランダ人を正饗に招いた。また私に伝言をよこし英人も招くつもりであったが、キャプテン・コピンドールが帰ってくるまで見合わせるといった。

一〇月二七日

今日我々のジャンク、シー・アドベンチャー号の帆柱が立った。三、四〇〇人の男たちがこれに集った。隣人たちすべて、というよりは全町の人が、彼らの下僕を送り、また我々と付合いのある人は彼ら自身が来て、日本気質により酒や食物をジャンクに持参して、順調な航海を祈った。士官全員は各々酒の小樽一樽を贈られた、また彼らの俸給の前払いとして銀一枚ずつが支給されるどころだったが、私はこれをキャプテン・アダムズの来るまで見合わせさせた。

伏見の藩主の家来に白竺木綿一コルジ二〇レアルの品四〇反を、一反一四匁ずつで売った。合計五六〇匁である。

平戸侯は私に鹿一頭を贈ってくれた。

一〇月二八日

ゴレスソンの細君が酒一壺と無花果そして蜜柑をみやげに持ち、^{Corsano}生後二〇日の娘を抱いて英国商館に来て、娘の名前をつけてくれと望んだので、その同意を得てエリザベスにした。

上総様(の家来)の語ったところによると、主君から受けとった手紙に⁽⁹⁴⁾大御所様は大坂に戻るはずで、主君も同行し、破損した城を強化しなおして守備兵を入れるとあったそうだが、それはまた戦争が起る前兆である。神よどうか世の中がうまくまとまりますように。

一〇月二十九日

我々は豊後様から豚一五匹を買った。値段は全部で丁銀八〇匁であった。

一〇月三〇日

我々のオジアンダー号に水先案内人を派遣してくれた⁽⁹⁵⁾五島の代官が、今日英国商館を見に訪れ、牛肉と⁽⁹⁶⁾鶏一〇羽を贈り物として持参した。彼は背骨の痛みをいやすために巻岐の温泉に行くところだそう。

支那甲必丹は今夜半弟が彼あてに陸路手紙をよこしたといい、その手紙によると権六殿が、我々の仕事で兄弟がシナに送ろうとした一艘のソマ⁽⁹⁷⁾船すなわちジャンクを長崎で停船させたそう、今の噂によればシナの近くの高砂と呼ばれる島に兵隊を運ぶためという事である。しかし私はむしろ大御所様が琉球を、たぶん秀頼様が潜伏してはいないかと考えて調べようとしているためだと考える。

私は長崎に二通の手紙を書いた。一通はジョルジュ・ドゥロイヌにチャンの見本を送ってくれるように、また同時にマンゴウと梨が送られてきたことを報告するためである。もう一通はメルヒョル・ファン・サントフォルトあてで、長崎で作らせる四種の大

釘または鉄の表である。大釘一〇〇本、より小さいもの一〇〇本。なお小さいもの一五〇〇本、最小のもの二〇〇本。

一〇月三十一日

上総様の家来が、かねて広言していた通りにこれから我々によくしてくれるらしいので、私はハント君が以前にくれた大型ピストル一挺を贈り物とした。

十一月一日 (和暦九月二〇日)
(新暦十一月二日)

今日は日本人の間の祭礼で、馬を走らせ弓矢の的を射るのである。

十一月二日

長崎經由で一シナ人を通じて一通の手紙を⁽¹⁰⁰⁾シャムのガーネイ君に書き、シー・アドベンチャー号が昨年破船して琉球に着いた次第と、現在ほば昨年と同じ量の荷を積んで彼地に行く用意ができていて、エドモンド・セイヤーズとキャプテン・アダムズが乗って行くことを報告した。またオジアンダー号が当地に着き、ラルフ・コピンドールが指揮官で、ジョン・ハントが船長であり、彼とキャプテン・アダムズは日本の朝廷に行っていること、オランダ人が黒たんを積んだジャンクというかつこうの獲物を海で得て、大御所様が船も品物も彼らの自由にしてよいと許可したことも報告した。

十一月三日

平戸侯は英船の船員の一人を追放した。その船員を刀で傷つけたために若い紳士を内匠殿が追放したからである。そこで紳士は呼び戻され、船員は追放され、内匠殿は叱責された。またある若

者が盗みをしたために斬罪に処せられた。

一月五日

権六殿の家の一人が都から来て、キャプテン・コピンドールが駿河から戻り、ただちに平戸にこようとしているといった。

一月六日

我々は今日道の向うのジョアン殿の家を地所とも一貫七〇〇匁で買い、昨年と今年の借賃は払わないことになった。それは我々の商館に近く、道を隔てて建っている大きな家で、船具やその他のどんな物でもしまつて置くのにふさわしい。そして彼はこの売買に伴なつて、この家の前に壁を造るために小舟三〇隻分の石を我々によこすことになつてゐる。

私はキャプテン・コピンドールからの手紙二通を受け取つた。一通は都発一〇月二四日付、そして他は大坂発一〇月二八日付である。そして他に二通、イートン君から受け取つた。一通は都発同月二三日付、他は大坂発同月二八日付である。その中でキャプテン・コピンドールは、大御所様が彼が携帯した贈り物を非常に喜んで受理し、彼に時服五枚、槍の穂先一〇振、矢尻一〇〇箇、脇差三振を賜わり、また我々のために薩摩侯にあててその全領内で貿易するようにとの書状を下賜されたと報告して来た。彼はまた大御所様が江戸の伴天連達のところへキャプテン・アダムズをやり、その領地の外へ僧衣を着た者すべてを追放したのに、なぜまた来たかを尋ねさせたことも書いてきた。彼は今後日本人がメキシコへ行けば死刑にするという布告を出していたが、これらの伴天連達は船でメキシコから着いたばかりだったのである。

一月七日

私はシャムのガーネイ君にあてて写しにあるような手紙一通を書いた、そして長崎のメルヒヨル・ファン・サントフォルトに、同地にむかう最初の船で発送してくれるように頼んだ。ガーネイ君あるいは他のその地位に当る人にあて、船が来るのが前もつてわかつたら、船荷を用意するようにといつてやつたのである。

また、私は二通の手紙を書いた、一通は支那甲必丹の便によつて、メルヒヨルに八〇〇〇本の鋌を買うように云つたもの、そしてもう一通はジョルジュ・ドゥロイスに五ないし六〇〇斤の松やに買い付けるようにいってやつたものである。

一月八日

私は長崎発新曆一月一四日付のジョルジュ・ドゥロイスの手紙を受け取つた。彼はその中で薩摩侯が四〇〇隻の兵船を急いで仕立てたがその目的は知られていない、と書いて来た。また大御所様が日本のすべての藩主あるいは殿を次の三月に駿河に召集するということである。

彼はチャンを長崎で一〇〇斤三五匁で買うつもりだと書いて来た。

ウィツカム君がかつてジョン・ジャパンを解雇したときに、琉球で雇つたマルチンという名の日本人が脇差すなわち短剣を一振と、御器すなわち皿一〇枚を盗んで捕えられ斬罪を宣告された。

しかし彼は長崎の住民だったので、藩主は一命を助け、再び当地に舞い戻つたら死刑にするという条件で、その領地から永久に追放した。

一月九日

オランダ人が捕獲したジャンクの船長のポルトガル人が再びエ
ンクホイゼン号から足枷をしたまま逃亡した。そしてそれは皆が
Atterpagan
思うように見張番がそのことを承知していなかったらできなかつ
たろう。

逃げたのはポルトガル人船長ではなく、その船のシナ人及びカ
フロの奴隷一〇人であった。

権六殿は平戸侯に手紙を送り、ダミアンとフワンを自由にする
ためだけの手は尽したが、カピタンが何もしようとしなかつ
た、しかし船の出る前に彼が自分自身で出かけて彼等を連れ出
そうと書いてあった。これが権六殿の狡猾なところである。なぜ
なら彼は今や大御所様が二人を自由にするように命じたことを知
っているからである。さもなければ彼はダミアンの持ち物を没収
しようとして、彼らを縛り首にもしかねなかった。

一月一〇日

支那甲必丹は長崎にいる弟から手紙を受け取り、それによれば
長崎からシナに向けて七七、八人の乗組員を乗せて出港したシナ
・ジャンクすなわちゾマ船が海で海賊に会い、海賊たちは乗組員
全員ののどを切り、品物を全部持去り、その結果ジャンクは七、
八人の死人を乗せて五島の海岸に打上げられ、残りは船から海中
に投げ出されたということである。

我々の通訳ゴレサンは私の勘定で五匁をペドロに支払った。彼
に靴を買ってやるためである。

マティンガの下婢のおとが逃げたが、追手が連れ戻した。逃げ
馬庭 *Matinga* Oio

た理由を尋ねたところ、遊びたくて我慢できなかったためだと答
えた。

一月一日 (和暦一〇月二日)
(新暦一月二日)

支那甲必丹は弟から手紙を受け取り、その中には我々からダテ
イ一布二〇〇反を買いたいこと、またそのための金を送るつもり
だと書いてあったそう、哀れなシナ人にそれをやって彼等の衣
服にさせるためだという。そのシナ人たちは琉球と薩摩の海岸と
は漂着した二隻のジャンクに乗っていた連中で、その中の何人か
はおぼれてしまい、のがれた連中は丸裸だったそう。彼の語る
ところによると、彼ら兄弟はこれらのダテイ一布を前述のシナ人
にやるつもりで、彼らの大部分は南京の近くに住んでいるそうだ
が、これを英国人の贈り物だと彼らに云うつもりでいる。なぜな
らシナ貿易を開くについて彼ら兄弟が差配していることで、イギ
リス国民をよく云っておかなければならないからだそう。彼ら
兄弟はこれらダテイ一布に一反につき一〇匁支払わねばならな
い。

我々は火薬一樽の残りを受け取った。それはザンザパーの家に
残っていた非常に粗悪なもので、我々の新しい小屋にしまった。
ニールソン君はジャンクの書記に慣例に従って、航海中の船員用
の魚の費用として小粒で三三四匁を支払った。そして彼らが九日
に買った米の価格は九三二匁四分。

一月二日

私は平戸侯の許へ行き、左兵衛殿が、もし人々が自分の手紙を
見ても二人を自由にしなかった時は、自分にその旨伝えてくれ

ば別の手段を取ろうと言ってくれたと、イートン君が知らせて来たことを伝えた。そこで平戸侯は、人々が二人を自由にしたかどうかを権六殿の所へ聞きにやろうと言ってくれた。権六殿の家来が私を尋ねて来ていたが、彼がこへ来たことは口外しないほしいと私に頼んだ。彼らとは二重に取引きすることになる。

一月十五日

平戸侯の肥前様は大御所様の御用として左兵衛殿に送るために象嵌入燧石鳥銃八丁を取りよこした。私は一丁二〇〇匁の値を *Shahane* につけ、その旨左兵衛殿に書き送り、同時にダミアンとフワンの釈放について権六殿あてに手紙を書いてくれたことを謝した。

一月二日 (和曆二月一日)

藩主の家来の武士の一人が私に贈り物に鶏五羽をくれた。また、スキテと朝鮮人がそれぞれ蜜柑一籠をくれた。

一月二日

備後の柄の定宿の女主人が長崎から戻り、英国商館を訪れて梨を贈り物にくれた。私は彼女に託してイートン君に手紙を送った。五日前に藩主の家来を通じて送った手紙と同じ趣旨のものである。また私は長崎のメルヒョル・ファン・サントフォルトとジョルジュ・ドウロイスあてに二通手紙を書き、銀を八〇〇〇本と、オシアンダー号を整備するためシナの油八樽を支那甲必丹の弟から買うように指示し、そのために早舟を一隻送った。

一月二三日

藩主は私に権六殿から受け取った手紙を送ってよこした。権六殿は藩主にダミアンとフワン・デ・リエ・バナを自由にすると知ら

せてきていた。

一月二四日

夜ふけにオシアンダー号の砲手の船室から一五〇斤の重さに相当する鉛が盗まれた。大砲の火門のおおいと、船を修理する際に舷側からはぎとった古い鉛とである。それらは砲手ジョン・クローの船室から盗まれたが、彼がそれを黙認したかどうかはわからない。またもや疑いはスコットランド人のロビンにかかった。

彼は自分の盗んだ銀といっしょに以前に鉛を少々売りたいと申し出て、盗品ともどもつかまっていたからである。ハント君の話によると、倉庫からさらに二〇〇斤以上の鉛が盗まれているそうで、くだんのスコットランド人ともう一人同郷のジョッキーが数回にわたって運び去ったものらしい。

一月二五日

我々は琉球でジャンクから逃亡した悪者の日本人水夫に出会った。それで、彼が平戸の町を歩いていてオランダ人に雇われるところを見かけたので、というのはヤコブ・スベックスはいつでも以前に英国商館で働いていたことがわかる人間を雇い入れたがる気性なのだが、この男を捕えて裁判官の前に連れてゆき、彼に対して述べられる罪状に対して申し聞きするまで拘束してもらった。

一月二六日

平戸侯はスペイン酒一瓶を取りに來させ、オスタウィック君の外套の色が美々しく王者にふさわしいから買いたいと言った。オスタウィック君は藩主に二〇〇匁で売った。私が聞いたところに

よれば、ポルトガル船のカピタンがオランダ大船から逃亡し、今月ひそかに彼を待つて仮泊していた四隻の帆船に向つて泳いでいったそうだ。このため、キャプテン・スペックスは船長のディリック・デ・フリースに対して大變立腹しているそうだ。 *Derrick de Vries*

一月二十七日

早朝私はキャプテン・アダムズから今月一七日小倉発の手紙を受け取った。彼は二、三日うちにこちらへ来たいと言ひ、キャプテン・コピンドールを健康のすぐれぬまま都に残して来たこと、ダミアンとフワン・デ・リエバナの釈放方につき大御所様からのお墨付を持つて来ることを書いてよこした。私は彼に直ちに返事を書き、知工（事務長）の甚五郎に託し、丁銀五個二〇〇匁も、必要があれば陸路帰る時に使用する（*のほろ*）ように添えて託した。彼は金子を持ち合せないと書いて来たからである。

キャプテン・アダムズは正餐のすぐあと帰つて来た。我々は大御所様、後藤庄三郎、左兵衛殿からの手紙を手渡そうとして藩主の館に出向いた。しかし藩主は鷹狩りに出かけ、我々は手紙を家老の大炊殿に預けて帰館した。

一月二十八日

キャプテン・アダムズはエドモンド・セイヤーズとジョン・オスタウィックと共に長崎へダミアン・マリノとフワン・デ・リエバナの釈放に関するお墨付を持つて行つた。キャプテン・コピンドールは午前中こちらに着いた。

一月二十九日

大坂の宿主が送つたと書いてよこした諸白二樽はキャプテン・

コピンドールが乗つて来た帆船では見つからなかつた。また、ウィッカム君が着物やその他の物を入れて送つた二〇〇匁相当のうちの箱も同様同船中で紛失した。さもないればどちらも船に積み込まれなかつたのである。

一月三十日

午後キャプテン・アダムズがダミアン・マリノをともなつて長崎から帰つた。しかしフワン・デ・リエバナは上陸して病氣になり長崎に残つた。人々はキャプテン・アダムズが行く前の日に二人を釈放したのである。しかし、ダミアンの語つたところによると、ポルトガル人たちは彼らに死を宣告して、彼は死すべき者として、懺悔をし、死に備えるよう言われていたそうだ。これは何か月前のことで、それ以来釈放される瞬間まで、いつ死なねばならぬかと思つてきたという。そして、ポルトガルのカピタンは山ほどの約束をして、自分とともに行くように説得しようとしたが、説得できないとわかると、イギリス人ともオランダ人とも行かないことを約束させようとしたそうだ。

一月一日（和曆二月二日）
（新曆二月二日）

私はキャプテン・コピンドールから、上方へ行くとき私が貸した銀の塩入れ、銀のさじ二本とフォーク二本、ならびにやはり貸してあつた銀の小カップすなわち味見用小杯を返してもらつた。彼はまた私に大御所様から賜つた時服のうちの一枚と上等のカシヨすなわちチャウター布一反を贈り物にくれた。

二月二日

ルイス・マルティンが平戸へ来て私に食パンをくれ、色々とお

世辭を言い、私が多くの人から、ダミアンとフワンを自由にしてやるという慈悲深い行為によって賞賛されていると語り、また、この件に関しては船のカピタンに落度はなく、悪いのはスペイン人たちだと言った。いづれにせよ、そのように権力をふるうなら彼らは全部我々の敵である。

私は彼が八日か一日の間町にいてひそかに宿に泊っていたことを聞いたが何の理由かは知らない。私は彼に、すこし前に彼が町にいたと聞いたことがあったと言ったところ、彼は否定はせず絹を売るためだったと言った。

二月三日

朝早く藩主のところから我々を夕食に招待しに来た。我々のジャンクがシャムへ行く用意ができたことを知ったからである。宴会はすばらしかったが、酒は過分であった。出席した英国人はキャプテン・コビンドル、キャプテン・アダムズ、ニールソン君、エドモンド、セイヤーズ、ジョン・オスタウィック、そして私である。

二月五日

私は今日キャプテン・アダムズに銀六〇〇ポンドを渡した。そのうち四〇ポンド一〇シリングは対馬の灰吹銀、残りはレアル貨で、あわせて二四貫である。

二月六日

私はビスケット二〇壺と紙五〇〇枚をジャンクに送り、キャプテン・アダムズにシャムへの船旅に際して手紙を渡した。すなわち、(B)シャムの支配人ジョン・ガーンイ君へ一通、バンタムの支配

人(13)ジョン・ジャーデン君へ一通、パタニの支配人アダム・デントン君(John Denton)へ一通、そして、ジョン・ガーンイ君あての包みに、送ろうとする積荷と商品全部の船荷証券を同封した。また、ビスケット(14)を三壺、一つはガーンイ君へ、一つはシャープ君へ、一つはデントン君へ、私自身の贈り物として積み込んだ。キャプテン・アダムズとエドモンド・セイヤーズへは、もしシャムへ到着しなかった場合、どのように事を運んだらよいかについてのメモを手渡した。

そのようなことがあってからシー・アドベンチャー号は停泊地を出発し、オランダ人は出発に際して六発の祝砲を打った。すぐ後でヤン・ヨーステンが都へ行った。オランダ人は出発のとき九発の砲を打った。私はジャンクで川内浦まで行き、ブドウ酒一樽、密柑一籠、梨一籠とビスケットを籠の三分の一持参し、日本気質で出発する仲間の健康を祈って杯をあげてから戻った。

二月七日

風も天候も大変良かったので、シー・アドベンチャー号はけさ川内浦からシャムへ向けて出帆した。神が同船に順調な船旅を与え給わんことを。

二月八日

我々はオジアンダー号に船載して来た蠟を計量し、一トン不足していることがわかった。我々は胡椒も計量し、これは二トン以上不足している。まちがいなくこれらは水夫たちが横領し盗み去ったのである。私は支那甲必丹の親類の二官(15)を胡椒の代金を持って来させるために対馬に派遣し、同地の宿主(16)にあててその金額を

二官に渡すように手紙を出した。そして、宿主が金を出さないような場合に備えて、対馬侯に裁きを依頼する手紙を書いた。また私は宿主に一コルジハレアルの白天竺木綿二反、一コルジ一五レアルの青パイラム布二反を贈り物とし、二官に宿主への六一七〇斤の胡椒と水牛の角三〇五本の勘定書を渡した。

二月九日

我々はオジアンダー号を浮かべて沖へ出した。これは過去二度の大潮の時期には出来なかったことである。

支那甲必丹アンドレア・ディティスに、銀杯を作る費用として八レアル私自身で貸し与えた。鉛を四〇棹、蠟を三〇梱、胡椒を五〇袋大坂へ送るため帆船に積んだ。

二月一日

我々は大坂のイートン君の許へ送るため次のような品を帆船に積んだ。

一〇〇斤あたり四²³44レアルの胡椒一〇〇袋¹⁰⁰ bags pepper at 44²³/picco
四分三厘。

一〇〇斤二四レアルの蠟六五梱¹¹一貫六三七匁一分。

一〇〇斤六レアルの鉛四〇本¹¹四貫四〇一匁六分。

積荷総計一八貫四六二匁一分三厘三毛。

支那甲必丹はイートン君に砂糖づけ一壺を贈った。我々はアンドレア・ディティスの丁銀二貫目を受け取った。その金は彼がニールソン君に船の費用として渡したものである。しかし彼はそのうち一〇〇匁を喜右衛門殿に、これらの商品を大阪へ運ぶ船の雇費用の一部として支払った。全額三五〇匁のうち残りは大阪でイ

ートン君が支払うことになっている。去年胡椒を買った商人が鉛一〇〇斤あたり六五匁の値をつけたが、やがて前言を取り消して一〇〇斤六〇匁の値をつけた。

二月一日 (和暦二月二日)
新暦二月二日

唐津侯に次のような品を売った。一コルジ一レアルの白天竺木綿六〇反¹¹九〇〇匁。スラット掛布五反¹¹五〇匁。計九五〇匁。

二月三日

我々はジョアン殿に商館の西側に道を隔てて建っている倉庫を譲渡してくれた代金七〇〇匁を丁銀で支払い、これで全額払ったことになる。そのうち一貫目は以前に支払ってある。オランダ船の船長ディリック・デ・フリースは出発の用意ができたので明日我々を正餐に招待してくれた。大坂へ送る荷物を積んで帆船が戻ってきた。

二月四日

我々はオランダ大船の上で正餐を取った。陸に帰ったとき三発の砲を打ってくれた。キャプテン・スベックスは正餐には来なかった。彼はうぬぼれが強すぎる。

二月五日

私は一シナ人に託して、ジョルジュ・ドゥロイスにあらゆる種類の庭園用の種子を送ってくれるように手紙を書いた。

二月六日

支那甲必丹の弟のキャプテン・ハウが私に贈り物として無花果を一樽だったか、日本の青い無花果一壺だったかをくれた。我々はオランダ船とオランダのジャンクの船長たちを明日正餐に招い

た。彼らは最初の順風で航海に出る支度が出来上っているからである。

二月一七日

我々はオランダ人を正饗に招き、やって来た面々は大船の船長のディリック・デ・フリース、商人のウィルレム・ヤンスゾーン、ジャンクの船長ピーテル・ヤンスゾーン、大船の水先案内人、それに外科医のフレデリック君である。私はディリックに封をしない手紙を運んでもらいたかったのだが、彼が言うには、キャプテン・スベックスは、英船が彼の手紙を運び現地のオランダ人に渡した礼としては、我々の手紙は封をしてディリックが運んだ方が喜ぶだろうと思うことである。さもなければ、彼は我々の封をしたのとはしないのと二通りの手紙を運ぶことになるだろう。私はイートン君から都発一月二三日付のと大坂発一月三〇日付のと二通の手紙を受け取った。また、江戸、駿河、大坂での仕事の勘定書とキャプテン・コピンドールが上方で贈り物にした物品のノートも受け取った。

ダミアンがフワン・デ・リエバナと長崎から戻り、私に諸白一樽と梨一皿を贈り物にくれた。大坂の宿主が私に日本の硯箱を贈り物に送ってくれた。

二月二〇日

私はパンタムのキャプテン・ジャーデンあてに、写しにある通り、オジアンダー号の到着以来の出来事を書いて送り、同様の手紙をシャムの支配人ジョン・ガーネイ君にも送った。また第三の手紙をバナのアダム・デントン君に、他に二通キャプテン・W

・アダムズとエドモンド・セイヤーズに送った。最初のパンタムあての手紙はキャプテン・ヤコブ・スベックスの気が変わってエンクホイゼン号で送ることになり、他の四通もやはり彼の気が変わってシャムへ行くピーテル・ヤンスゾーンのジャンクで送ることになった。キャプテン・スベックスは、我々が彼らの手紙を運んだ礼として我々の手紙を右のどちらかの経路で送ろうと申し出てくれたのであった。また、キャプテン・コピンドールの手紙一通もパンタムあての手紙に同封した。

二月二一日

支那甲必丹のアンドレア・ディティスから丁銀三貫五〇〇匁受け取った。そのうち五〇〇匁は大判一枚五五〇匁を添えて、助大夫殿にオジアンダー号のマストを購入してもらうため支払ったが、五〇〇匁は悪貨で戻されて来た。

二月二二日 (元和元年一月二二日
新暦一六六六年元旦)

夜明け方、オランダ人は大砲と小砲を沢山打ち上げた。彼らの元且にあたるからである。午前中、オランダ人が捕らえたジャンクがシャムに向けて平戸の停泊地を出発した。私はウィッカム君とイートン君に今月一八日と二〇日付けで手紙を書き、今日まで手許においておいたが、それを左兵衛殿の手に託して送った。また、日本語で彼の主人にあてて、キャプテン・アダムズがもたらした手紙を受け取ったこと、及びダミアンとフワンの釈放に関して書き送った。

二月二三日

今日、一六才の少年が小舟を盗んで他の島へ持ち渡った科で斬

刑に処せられた。私は藩主の許へ助命に人をやり、藩主もそれを認めて、しばらくして処刑を暫時見合わせるよう執行人のあとから家来を遣わしてくれたのだが、執行人は待とうとせず、助命の便が来るより先に、刀の切れ味をためすために少年を一寸だめしに切つて殺してしまつた。

私はビーター・ウオッデンにブドウ酒一樽、パン一〇個、密柑一籠を持たせて川内浦にいるシャム行のジャンクの船長ビーター・ヤンスゾーンの所へ行かせた。そのジャンクは同船の修理について、日本人たちと勘定の決着をつけるため同地にとどまつていたので、オランダ人たちはそれにつき一人の悪賢い人間を雇つていたが、それが、ちょうどキャプテン・アダムズの書役が我々にしたように、彼らをだましたのである。書役はオジアンダー号の費用として大工たちのために支出した五〇〇匁の金子を持ち去り、その上にジャンクの費用総額も受け取つたのである。

二月二四日

我々の雇つている大工たちが来て、ニールソン君がジャンクの書役に支払つた五〇〇匁をもらえまいかと言つた。実際には書役が大工たちをだましてジャンクの費用だと言つたのだが、事実上はオジアンダー号の費用なのだから、という訳である。

そこで我々はまだ一度五〇〇匁を支払わされ、ジャンクが戻るまでその勘定としておくことにした。

(12) アカブルコから来航した船のスペイン人三人が英国商館に来た。彼らの言によれば、七、八艘の船が南方の海を航行中で、ペルーの海岸地帯で傷害事件をおこし、全船武装していること、ま

たメキシコのスペイン人がすべての外国人をメキシコから排し、再び同地へ貿易に来させないことを宣言し、そむいた者は死刑に処すとしたことはいずれも事実であるそうだ。

二月二五日

クリスマス。内匠殿はブドウ酒二樽と魚二尾を、藩主は鯨二切、支那甲必丹はシナ酒一壺を贈り物にくれた。他の隣人たちもクリスマスを祝つてささやかなものを贈つてくれた。

二月二六日

私は藩主と内匠殿の許に、日本の慣習に従つて、贈り物の礼を言わせるため通訳を行かせた。

今日オランダ人の真鍮の半カノン砲が鋳あがつた。五〇貫の重さのすばらしい砲である。 *tenni cannon* *po. 5000 weight*

二月二七日

夜になるころ、藩主の側用人総右衛門殿が、藩主の許へゆく途中だということで、英国商館へ来た。支那甲必丹が彼に会つた。彼の用向きというのは藩主が会社から借りている金のこと、彼の言によれば藩主はすぐ支払うそうだ。また、オランダ人が今までに藩主に掛けて一〇〇貫もの商品を買つたように、来年適当な値段で支払うから我々の商品も譲れという趣のことも言つた。彼が言うには、藩主はこのようにして少しづつ祖父の代からの負債を軽くしてゆくそうで、負債がなくなるまでは、この状態を続けるのである。彼が引き取る商品は都の日本人たちに与えるもので、法印様は彼らから以前に何度か金子を受け取つており、今だに利子がふえている。このようなことが続けば、彼によい結果が

もたらされぬだろう。それで、私は会議を開かねばならないので、このことを明日に持ちこすことにし、総右衛門殿にはキャプテン・スペックスと同様私も喜んで藩主のために出来るだけのことをしたいと伝えてほしいと頼んだ。

水夫のニコラス・グラントは酔っぱらって自分の腕を刺した。
 Oostawijk 君が二ペンスの金を彼に貸そうとしなかったからだ。

二月二八日

支那甲必丹の新しい家が今日棟上をし、隣人たち全部は日本気質で彼に贈り物をした。私は諸白一樽、スペイン酒二瓶、鮭の干物、オランダチーズ半分を贈り、あとから隣人たちと一緒に自分でも出かけた。そこで私は藩主の大口頭が儀式を行なうのを見た。それは次のように行なわれた。まず彼らは届けられた贈り物をすべて運びこみ、大黒柱の前にずらりと並べ、各々の中から一番良いものを取って柱の根元に置き、それら五、六個のひとつひとつに酒を注ぐ。これらのことをひどく謙遜な態度で静かに行ない、その間一言の言葉もしやべらない。しかし、終った時、彼らは残りの贈り物を取って大麥愉快に冗談を言いながら飲み食いし、ついには全員、あるいはほとんど全員が酔いつぶれるほどだった。人々は、新しい家がこのようにしてお浄めが済んだからには住む人間にとって幸運なものになるだろうと思うと言った。過去に神主たちが定めた規定があり、それがそう教えているからである。

船員が英国商館に仮面をかぶってやって来て、それからクリス

「リチャード・コックス日記」試訳（武田・森）

マスの余興を上手に楽しそうにやった。

二月二十九日

私はマティンガに着物を作るように五〇匁の縞子一反と一〇匁のタフク一反を与え、セラ布の着物二着をおととふくに与えた。

また、一〇斤のプリアマン胡椒で一斤八分すなわち二〇〇斤八〇匁のものを藩主の内科医に売り渡した。

船長のハント君がぶんぶん怒って陸に上って来て、ジョン・シエパードにそそのかされてコックのジョン・ココラの頭を傷つけたことを書いておくのもよからう。彼が理由もなしにその男を手荒く扱ったり打ったりしたのはこれがはじめてである。

二月三〇日

我々は白石灰七三二袋を一袋三分で買った。大麥安かった。私は外科医のために船用の諸白と牛の脂肪をみつ付けてくれるようにジョルジュ・ドゥロイスに手紙を書いた。神が健康を恵み給わんことを。南京のシナ人が南京酒一樽とシナ菓子一ダースを贈り物に持参した。

二月三十一日（元暦元年二月二日）
 （新暦一六六一年二月一日）

私はマティンガが会社の役に立っているのを、住居用として三〇〇匁与えた。

また、日本人の床屋らっぱ堂が密柑一籠を贈り物にくれた。

私はジョン・ハント君に会社の仕事のために上陸してもらい、真鍮の滑車のごとで相談に乗ってほしいので手紙をやったが、不機嫌な返事をよこしたことを書き忘れた。

注

- (1) イギリスはユリウス暦を使用していたので、他の西欧諸国の使うグレゴリオ暦(新暦とコックスは呼ぶ)に一〇日遅れる。以下主要な月日に各暦日を付記する。
- (2) chief justice at Firando 大目付か。
- (3) 総兵衛、慶長一年正月法印・隆信連署の朱印で、扶持六石と屋敷を下賜された(御家世伝草稿 宗陽公)。
- (4) Duroid, Jorge 長崎在住の商人。Susana は日本人妻。
- (5) 李旦 Andrea Ditis シナ人商人(泉州出身・甲必丹)。平戸を根拠地として台湾中心の貿易に従事、朱印船貿易家。弟華宇とともにセーリス来日(一六一三年)当時から、持家を商館に貸すなど、英国人と関係が深く、中国本土との交易を周旋するといつて、しばしば金品を持ち出した。
- (6) イタリア人。英商館のジャンク、シー・アドベンチャー号に一六一四年航海士として勤務したが、それが利敵行為と見なされ、長崎碇泊中のマカオ船に逮捕・抑留された。
- (7) イスパニア人。ダミアン・マリンとともに、シー・アドベンチャー号に雇われた船員。それを利敵行為とされ、ダミアンとともにマカオ船に逮捕された。
- (8) Garrocho de la Vega, Pablo ヲカオ船の船長。
- (9) 松浦肥前守隆信。久信の長子(母大村純忠女)宗陽公。天正一九一寛永一四。父久信が夭折したので、慶長七年祖父法印公から平戸藩六万三千余石を襲封。
- (10) 松浦源太郎信清、久信第三子次男、叔父松浦豊後守信実の養子となる、寛永元没。松浦半左衛門(源四郎)信辰、主殿、久信第四子三男、寛永一二年徳川家光に召され、御小姓組に列す、同一五没、四二才。
- (11) 松浦豊後守信実、松浦法印鎮信の弟。元和七年八月二日没。久信の次男信清を養子とした。
- (12) 志佐純意の第二子、松浦法印の父道可の外孫、佐川美濃守純昌の養子となる。隆信の家老として藩財政の確立に努力切支丹弾圧にも辣腕を振った。寛永元没、四五才。(御家世伝草稿、宗陽公)には元和八年三月二三日没享年四五才とあり。
- (13) 松浦三五郎信正。松浦法印鎮信の子。母は朝鮮人。後年放蕩のため平戸の近郷に蟄居させられた。
- (14) 寺沢志摩守広高又正成。唐津藩主。永禄六一寛永一〇。豊臣家に仕え肥前国唐津で六万石を領す。朝鮮の役、関ヶ原役の功により一二万石に増増される。家康に接近した。文禄三年初の長崎奉行に就任した。
- (15) Enckhujsen オランダ船。約三〇〇トン。同年八月九日川内に入港。船長ディリック・デ・フリース。一日早く来日のヤカトラ号に対して「大船」とも呼ばれる。翌年二月二四日離日。
- (16) 同年八月八日平戸着、船長ピーテル・ヤンスゾーン、商務員補レオナルド・カムプス。Peter Jansoon Leonard Camps チャンパン(当時の安南国に南接するチャム人の国、一六九七年に亡ぶ)発のポルトガル・ジャンク(サン・アントニオ号)を捕獲して来た。一日後 San Antonio

- に來日のエンクハイゼン号に対して「小船」とも呼ぶ。
- (17) 櫻応の前に風呂に入るのは当時の一般的な習慣であった。
(本光國師日記等)
- (18) オランダ号(英船、同年九月四日平戸入港、翌年二月離日)の船員でプリマスの金持の息子という。
- (19) Jones, Maurice 翌年二月オランダ号で離日。
- (20) Sayers, Edmund 英商館員。開館当初より勤務。当初は朝鮮貿易の開発を担当。のち対馬・長崎等平戸付近での営業面を担当。またアダムズと同船してトンキン等に行き航海記を残している(C. Purnell, *The Log-book of William Adams*)。
- (21) 長谷川権六藤正、左兵衛藤広の甥、慶長一九年藤広が堺奉行を拝命するに及び、その推挙で長崎奉行になる。寛永三年まで在職。
- (22) 村上氏は原本索引(四四一頁)で、松浦権之助信忠とされたが、同人は「寛政重修諸家譜」によれば、当主隆信の末子であるから年代的に疑問。
- (23) 侍頭か、宇野内蔵正と考察する向もあるが、宇野姓の家臣 Captain General は宗陽公藩士名簿御家中侍帳等に見られないので疑問。
- (24) Kings steward 側用人か。松浦法印の女を妻とし、同じく末子三四郎を養子にしている。当時の重臣で英・蘭商館にも再々出入りしている。日記九月二日に receiver 勘定役として記載あり。
- (25) 左兵衛か。Little Antony とも呼ばれた sea bongew (船「リチャード・モックス日記」試訳(武田・森)
- 奉行)。
- (26) secretary 近習か。
- (27) 五島藩、当主は五島淡路守盛利、天正一九一寛永一九。福江に居住し、肥前国松浦郡下の、主として五島列島で一万二六〇〇石。五島列島には平戸藩領もあり、両藩の關係は深い。
- (28) 日記同年九月一六日に、フランスで五ポンドで買った。白アメジスト入りの大きな金指輪を、ティ・チャム・シヨフノという宦官に贈るからと支那甲必丹が受け取っている。ロックスは來日以前の二六〇三七八年に、東印度会社の社命で在仏した。
- (29) 松浦源太郎信清、久信の第三子で末弟は誤まり。注一〇参照。
- (30) chownee インドにおける英国人の兵營、宿营地。又ヒンズー語の chāoni はわらわき屋根。
- (31) 貨幣單位。10. condri=1 mas. 10mas=1 tael=5 shilling. 1 mas=1匁。
- (32) Neelson, William 英商館員、開館時より勤務。健康を害し、香岐の温泉に転地療養等の記事が見られる。平戸商館でロックスのもとで炊事管理・帳簿つけ等を主務とし、一六二〇年平戸で死亡。
- (33) 平戸の東南の良港。風・汐待ちや、船の修理等に好適地として使われた。英船はここに碇泊することが長期間にわたる。近くに丸山の遊女町もあり、船員の事故のほとんどがこの付近でおこっている。

- (34) *Rial of eight* スペイン語で使用の銀貨、半レアル貨。約四シリング六ペンス。4 *Rials* = 1 *peso* = 8 $\frac{1}{2}$ 文。
- (35) スマトラ西岸の金産地ブリアマン産の金。
- (36) *Cunha* (Guinea, Guinea), *Martin da* 一六一四、五兩年のカビタン・モール。日記九月二四日コックスからこの件で直接書翰を発信している。カビタン・モールはマカオから来航するポルトガル官許船の司令官。多年の勲功に対する恩賞として國王が任命するもので、単に貿易収入を得るのみでなく、マカオ滞在中は同市の行政・司法の最高権を掌握、在日中は同様の権利を在留同国人に行使した。
- (37) 帆船の種類。三本マストで前二本が横帆、後部一本が縦帆のものをいうが、小型の帆船の意味もあり、後者が妥当。
- (38) *Copindall, Ralph* オプンダー号の指揮官。大坂へは九月一日出発、駿府で家康に拝謁した。
- (39) *Eaton, William* 英商館書記。一六一三年開館から二四年の閉鎖まで勤務。ウイックムとともに江戸、大坂等で商品の販売に従事。
- (40) 徳川家康。天文一一年生。慶長八年二月一二日征夷大將軍となり江戸幕府を開き、同一〇年四月秀忠に譲位したが、大御所として君臨、元和元年豊臣氏を滅ぼす。同二年四月一七日駿府に没す。Emperorは大御所様と訳す。
- (41) 元和元年八月四日(英九月一六日)家康駿府に向い京都を出発(駿府記等)。
- (42) *Adams, William* 和名三浦安針 1564~1620 英人航海士、和蘭のロッテルダム会社の東洋派遣艦隊のリーフデ号航海長として一六〇〇年(慶長五)豊後佐志生に漂着、同乗のヤン・ヨーステンとともに徳川家康に仕えて外交顧問を勤めた。オランダ東インド会社、イギリス東インド会社の日本貿易開始と経営に助力するところが多い。自身でも朱印船を経営。一六二〇年五月二六日(西暦)平戸で病没。
- (43) 「慶元イギリス書翰」(岩生成一訳、異国叢書、駿南社 昭四刊以下「慶元」と略称)七一(三八一頁)で、コックスはイートンに調査結果を回答。
- (44) 「慶元」五〇(二八六頁)大坂発イートン、コックス宛に「予は今堺にてゼエヤと称する町のゼザイ・セエエモン方に宿泊せり」とあるが、この者か。大坂の役以後は平野藤左衛門方に宿泊。
Zeazy Seemon
- (45) 長谷川権六は元和元年九月九日シャム宛の朱印状を得ている(通航一覽 卷二六五 国書刊行会本 第六 四九八頁)。
- (46) インド人・アラブ人との貿易用語、二〇の意味。
- (47) インド産キャラコ的一种。「ロンドンの日本古文書」第二(村上直次郎編 史学雑誌一四編九・一一号付録 明三六年九・一一月以下「ロンドン」と略称)では「かなきん」と記述(かなきんは *Candkeene* と *Canbay* 製の廉価な綿布をいう)日記一〇月一十九日参照。
- (48) *Kings chamberlain* 用人か。
- (49) インド産絹織物の一種。丈夫なしま模様のもの。金糸・銀糸を織りこむ場合や、木綿との交織の場合もある。「ロン

ドン」第二には「しまもめん」と記述さる。日記一〇月一日参照。

(49) スラット(インド西部)産のもうせん又はテーブル掛けか。「ロンドン」第二に「さらさ」とある。日記一〇月一日参照。

(50) Capt. General 侍頭か。

(51) provodore=provider 賄方か。

(52) borel 粗織の毛織物の一種。

(53) 中小姓格、三〇又二五石(天祥院榎御代分限帳、以下「天祥院」と略称)

(54) 「慶元」七一(三八一頁)参照、イートン宛の書翰。

(55) Wicham, Richard 英商館員、商館開設以来勤務。一六一三年七月江戸に上ったのをはじめとして、以後江戸・駿府・近畿を往来して、各地で商品の販売に従来する。一六一八年三月(元和四年二月)に日本退去、ジャカタラで死去。

(56) 長崎居住のスペイン人商人。

(57) Santoford, Melchior van リーフネ号の商務員。そのまま日本に滞在して貿易に従事。特に母国オランダのために幕府との折衝にもあたる。長崎に居住、日本人を妻とする。

一六三九年お春らとともに日本を追放された。

(58) 大泥・パタン。マライ半島東岸中部にあつた女王国。イギリス・オランダの商館あり。

(59) 中国・シヤムの重量単位、斤(担)にあたる。一六〇匁。
1 $\frac{2}{3}$ lb. 100 carries=1 picul

「リチャード・コックス日記」試訳(武田・森)

(60) 一六一四年に平戸で購入した約二〇〇トンのシヤンク。アダムズを船長としてシヤム貿易を企画し、同年二月十七

日川内出港、荒天で二七日那覇に入港、船体破損のため以後の航海を断念、翌年六月一日平戸へ帰港。その折はじめて持参した甘藷を栽培した。(日記同年六月一九日に農園を借りた記事あり、千里ヶ浜付近の鷹の巣畑をその跡と伝承する)アダムズ自身の航海記が *are* (Purnell, The Log-Book of William Adams)。

(61) Haut, John オジアンダー号の船長。

(62) Osterwick, John 英商館員。一六一五年オジアンダー号で来日。一六一四年長崎のシナ人商人六官の朱印船で交趾に向う途中、広南で殺害されたピーコックとカワードンの補充として勤務。

(63) 村山等安。長崎代官、切支丹。尾張名古屋に生る。流浪の末に長崎に身を寄せ、しだいに才覚をあらわし、町の代表として秀吉に取り入り代官となり、長崎経営に当るほか、家康の命により元和二年台湾征伐を試み、失敗。晩年末次平藏から大坂の陣に子が豊臣側に参加したのを訴えられ、一族疎せられた。元和五年、五一才という。

(64) 注一〇参照、藩主の長兄は誤まり。

(65) 元和元年二月に舟大工頭山崎弥右衛門が、藩主隆信から「おらんだいきりす船唐船并家中之舟作事者、為船大工中可相調候、家作事二ハ一切かまい申間敷者也」の判物を得たごとく、仕事は分化していた。(御家世伝草稿 宗陽公、

小葉田淳「松浦家文庫の海外交通史料」 史林一三一号
昭二五 六九〇頁)

(66) 軽船、糧で漕ぐもの。

(67) 約三マイル、一里八町であるが、日本の里の代りに使用が普通で、本来の単位に使用するときはことわっている。

(68) 長谷川左兵衛藤広、永禄一〇生、長崎奉行、重吉の弟 慶長八年に家康に仕う。妹夏が家康の侍妾。同一一年長崎奉行となる。切支丹弾圧に尽力。同一四年ポルトガル船マードレ・デ・デウス号を有馬晴信・村山等安とともに長崎港内で沈める。同一九年堺奉行、元和元年小豆島の代官も兼務、同三年一〇月二六日没。

(69) 光次、江戸金座の創祖、文禄二年京都大判座後藤徳乗の番頭から猶子となり、江戸に下って金吹座を開く。家康に重用され、金銀改役となり、外交面でも活躍。寛永二年七月二四日没。

(70) 長谷川忠兵衛藤継、重吉・佐兵衛の弟、兄とともに家康に仕える。慶長一四年の長崎での蛮船焼打にも功あり、摂津国の代官となり、多田銀山の奉行もする。大坂の役後は病を得て官を辞し、京都に居宅地を賜わり住す。寛文五年三月二七日没。

(71) 「慶元」七九(四一〇頁)江戸のウィッカム宛。

(72) スペインと同語圏で使用された貨幣単位。1 peso = 4 reales
= 8 reals。

(73) 華字、支那人甲必丹李旦の弟。朱印船貿易家。一六二〇年

平戸で没す。

(74) ニグロの奴隷をいう。日記同年十一月一三日にも再出する。

(75) *Byrampant* インド産の木綿布の一種。

(76) 又 *sela* インド産の絹・麻・モスリン製のスカーフ、マント、あるいは絹ターバン。

(77) ジャワ島北西端、当時バンタム王国の首府。一五九六年オランダ人が上陸、商館を開設。後イギリスもここに東印度会社支社をおき、東方各地の商館を統轄、平戸商館もその管理化にあった。

(78) 西インド(カンバイ地方)産の織物。

(79) *Speck, Jacques* オランダ人。同国平戸商館の初代館長(一六〇九—一三)ブルウェルと交代したが再び来朝して、一四一二年まで館長を再動した。パタビア・本国で東印度会社の要職につき、二九年再びパタビアに來航。総督クーンの死後その職につき、三二年迄在任。退官帰国。四五年頃没。

(80) 元和元年八月四日(英暦九月一六日、新暦九月二六日)家康駿府に向け京都出發(駿府記等)。

(81) 「慶元」七〇(三七七頁)ウィッカム宛。

(82) 同日記同年八月一三日、大坂の我々の宿主 *Yasozama*

Amanoia 殿から手紙を受領。「慶元」一〇〇(五九二頁)一六一六年六月一〇日付京都発ウィッカムから平戸コックス宛に、手紙の宛先を「平野町に住せる、大坂に於ける予 *Firano machi* の定宿の主人エチエロー殿とする」。日記一八年一一二月 *Yechero dono*

- 二〇日「二郎別名九右衛門殿」とある。「ロンドン」第六・八に「あまのや九郎兵衛」とあり、アダムズの定宿とある。
- (83) 注三参照。
- (84) 菓子の種類。果実を使用したパイ。
- (85) 発行者イートンは「慶元」七六(四〇三頁)駿府発ウィックムから、京都滞在中のイートン宛の書翰で、当時京都にいたことが判明。京都の宿主は孫右衛門(「ロンドン」第八による)。
- (86) Chudatは北インド産のマントあるいはシヨール用として織られた四角い布。Chauterは別語で、ベンガル産の木綿の反物の一種で、リンスホーテン(一五九八)、バルボサ(一五六六)に見られる。コックスは両方を混用したが、意味は後者と思われるので、「頭布」(「セーリス」と訳するのをさける)。
- (87) 木寺三右衛門。「ロンドン」第二がこの件の受取状で、その署名による。同文書参照。「慶元」七九(四一一頁)同書翰図版を参照。
- (88) 平戸助大夫か。平戸の商人で慶長九年八月二六日順化(安南国の首府)行の朱印状を下布されている。「異国御朱印帳」異国叢書巻一 附録 昭四 駿南社)。
- (89) マレーの度量 *santang* 主に穀類(特に米等)の量計に使用。二升四合に相当。地方差があり、金の目方にも用い米一 *gantaug* は約六斤に相当。本日記では大升一杯程度「リチャード・コックス日記」試訳(武田・森)
- (90) 松平上総介忠輝。文禄元年生、家康の六男。慶長三年三河長沢の松平家を嗣ぎ、以後加増され、越後福島で七五万石を領したが、元和二年改易され伊勢朝熊に追放された。天和三年七月信州諏訪で没す。九二才。妻は伊達政宗の女。
- (91) Amadabari (= Ahmedabad) インド西部の都市。
- (92) 豊臣秀頼、元和元年五月八日家康に敗れて大坂城で自殺。当時薩摩亡命の噂がもつぱらであったようすが、ここにもうかがえる。
- (93) 元和元年九月、家康は実子松平忠輝の驕竹を憤り、勤当した(駿府記等)。忠輝の妻が伊達政宗の女であるところからこの噂を生じたものか。
- (94) 虚報。元和元年九月下旬から一月中旬まで家康・秀忠ともに江戸中心に活動。大坂城は同年六月松平忠明を伊勢亀山から移している。
- (95) 五島列島中には平戸藩領の島があり、そのうちの一島の差配をする者と解する。「ロンドン」第一〇は、元和四年一二月付、五島の奉行のものであり、「近紹嘉」の署名がある。「宗陽公藩士名簿御家中待帳」「天祥院」に近藤姓が多く、恐らく「近藤」であろう。「天祥院」の在々御代官の項には、平戸中野と田平に近藤姓の者が在勤している。
- (96) 湯本温泉か。
- (97) 小船のこと、マライ語。
- (98) 家康、元和二年長崎代官村山等安に命じて台湾征伐を突

施。その準備。等安は元和元年九月九日高砂国宛の朱印状を受領した(通航一覽卷二一一、国書刊行会本 第五三八四頁)。

- (99) 和暦九月一日から二〇日までの、平戸の八幡社の恒例の神事。神輿の御旅所への御幸等のと、二〇日に神輿還御の後に流籠馬が行なわれる。現在も一〇月の亀岡神社祭に継承されている。セーリスの「日本渡航記」二〇月二三日(一一頁)にも記事あり。(村川堅固訳 十一組出版部 昭一九刊 以下「セーリス」と略称)

- (100) 慶元八九(四六〇頁)一五年二月六日平戸コックス発、ガーネイ宛の書翰に発送の記載あり。ガーネイは *Gurney* (John) とも記す、シャムの英商館長。

- (101) 元和元年閏六月二日メキシコから伊達政宗の船で *Fr. Diego de Santa Catalina* 等のスペイン使節が来日。二ヵ月後家康・秀忠に謁見、国書を提出。しかし国書の内容が家康の意を得ず、秀忠は贈り物も受けず、一行は冷遇され、翌年再び政宗の船で離日した(大日本史料一ノ一二、四三七頁以下。「慶元」七五 三九八頁、同八七、四四八頁同九〇、四七〇頁等)。

- (102) 慶長一九年正月の切支丹大追放を指すか。

- (103) 「慶元」八九(四六〇頁)一五年二月六日平戸コックス発、ガーネイ宛の書翰に発送の記載あり。

- (104) 島津家久、天正四一寛永一五。義弘第三子。文祿・慶長の役に武功あり。関ヶ原役後に襲封。海外貿易も積極的で慶

長一四年琉球を征服した。

船を集めたのは、元和元年九月琉球国王尚寧から家久に、明国の一〇年一頁の例をあげ、互市を許さないことを報じたのに対する処置(後編薩藩旧記雑録)か、同年二月江戸に参府したのを、または翌二年三月家康太政大臣宣下式に参列のため駿府に向ったのを指すか(本光国師日記等)。

- (105) 元英商館通訳「セーリス」一〇八頁「此の選弁は日本で生れたもので、バンナムから予等の船に載せて、ここへつれて来たものである。マライ語が上手で」以下略。

- (106) コックスの日本人妻か。

- (107) 腰布、インド産木綿布。厚手のもの。

- (108) *snapshance* 燧石銃。寛永二〇年オランダ船ブレスケンス号が南部領に來航して問題をおこしたとき、この形式の銃を試射した記録があるが、そのとき井上筑後守は同形式の短銃をすでに所持していたという(「モンタヌス日本誌」)。
- (109) 広島県福山市、福島正則四九万石の領下、上古から瀬戸内海交通の要地。正則は同五年六月改易、以後水野勝成が大和郡山から転封。

- (110) 日記同年九月一二日に貸与の記事あり。

- (111) 宗義智が元和元年没し、子の義成が一才で跡を継いだ。一〇万石の格式を朝鮮との国文に従事する功により許されていた。

- (112) 「慶元」八九(四六〇頁)同九〇(四七〇頁)同九一(四

七八頁)の各通。

- (113) 一六〇七年東印度会社に入社。バンタムを中心に東印度諸島間で活動。一三年一月バンタムの英商館長に選出され、一六年暮クローブ号で帰国。一八年再渡来。一九年七月一七日オランダ人と交戦中殺害された。(Ed. W. Foster. *The Journal of Jourdain 1608—1617*)

- (114) 両語とも積荷。lading は商館の公用貨物(本方荷物)、cargazon (cargaison) は商館員の個人分貨物(脇荷物)を指すものか。

- (115) 「慶元」九三(四九二頁)に関係記事あり。

- (116) Joosten Van Loodenstijn, Jan オランダ人高級船員。アダムズ等と一六〇〇年リーフデ号で来日。家康に用いられ江戸に住宅を与えられた。朱印船貿易に従事し、オランダ商館の助力もしている。二三年バタバアから日本に向う途中南支那海パラセル群島で難船死亡。

- (117) 長崎在留の商人、御朱印船貿易家。

- (118) 「慶元」九二(四八七頁)一二月一〇日、平戸発コックスより大坂のウィツカム、慶元九四、一二月二六日京都発イートンから大坂のウィツカム、「慶元」九五、一六年一月二日堺発イートンから大坂のウィツカム宛に関係記事。

- (119) 日記同年一月六日買い付けの記事あり。

- (120) ヤカトラ号の捕獲したポルトガル船サン・アントニオ号。日記以下の関係記事と「一七世紀日蘭交渉史」(オスカ・ナホッド著 富永牧太訳 天理図書館、昭三一刊)附録「リチャード・コックス日記」試訳(武田・森)

一五のスペックス発家康宛書翰(三三一頁)の記事による。

- (121) 日記同年一〇月二六日、平戸のコックスからイートン宛の書翰を発し計算書の送付を依頼。

- (122) 「慶元」九三(四九二頁)にガーネイ宛のみ所載。

- (123) 「慶元」九三(四九六頁)船の修理中に折ったとの記事あり。

- (124) 「慶元」九五(五〇三頁)に堺でイートンが受領した記事あり。

- (125) 注一〇一の乗員か。

- (126) 一六世紀に使用された三〇斤か三六斤砲。

- (127) 松浦源三郎鎮信。天文一八年生、天正一七年剃髪して法印に敍し、式部卿と称す。文禄・慶長の役、関ヶ原の役(東軍)に従軍。先祖よりの所館と香岐の六万三三〇〇石を領す。嗣子久信慶長七年三三才で夭折し、孫隆信が嗣ぐ。慶長一九年五月二六日平戸で没す。六六才。海外貿易に熱心で英商館の誘致に成功した。

- (128) 日記一六年二月二八日に支那甲必丹宅の新築披露の記事あり。